

< 小学校授業計画事例 >

1 単元名 江戸の文化をつくりあげた人々（新しい学問が広がる）

2 単元の目標

- 江戸時代における新しい学問や文化，新しい時代を求める動きなど，資料をもとに意欲的に調べようとする。 （関心・意欲・態度）
- 新しい学問が成立する過程で，身分上厳しく差別されてきた人々がどのようにかわってきたかを考えることができる。 （思考・判断）
- 年表，写真，絵，地図，文書資料等を活用して，国学や蘭学について調べ，新しい学問のおこりについてまとめ，表現することができる。 （技能・表現）
- 身分上厳しく差別されてきた人々が，どのように立ち向かっていったかを理解する。 （知識・理解）

3 単元計画（6時間）

主 な 学 習 活 動		配時
1	伊能忠敬がつくった日本地図 ○ 伊能忠敬が正確な地図をつくることのできた理由を予想する。 ○ 新しい文化や学問が人々に与えた影響について考え，学習問題をつくる。	1
2	新しい文化や学問をつくってきた人々の業績とその影響 (1) 歌舞伎が村人や町人の間に広まっていったことを，資料をもとに調べる。 (2) 杉田玄白・前野良沢のつくった「解体新書」や蘭学について考える。 ○ 杉田玄白らの業績について調べ，新しい学問の広がりやその学問を支えた人々について考える。 （本時） (3) 本居宣長が研究を進めた国学について考える。 ○ 本居宣長の業績について調べ，新しい学問の広がりやその影響について考える。	3
3	新しい時代への動き ○ 大塩平八郎の乱や百姓一揆の増加などから，気がついたことを交流しあう。 ○ 渋染一揆が起きた原因とその結果について調べ，自分なりの考えをもつ。	2
4	学んだことを瓦版にまとめよう ○ 自分の心に残ったことで，みんなに伝えたいことを瓦版に書く。	課外

4 本時の主眼

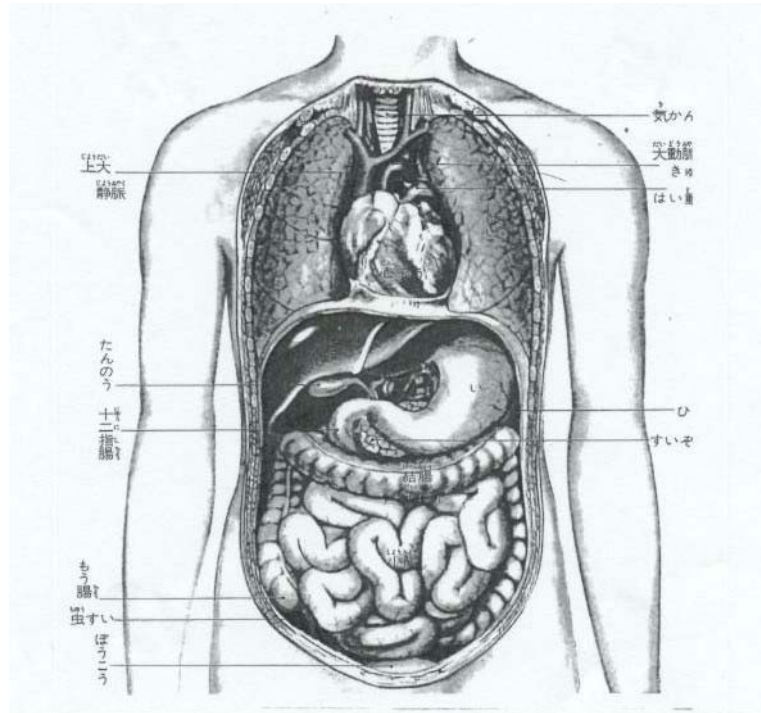
- 杉田玄白らの情熱が「解体新書」の翻訳を可能にし，江戸時代以降の医学の進歩につながったことや腑分けの名手のすぐれた解剖の技術と豊富な体験がその進歩を支えていたことがわかる。
- 学習問題に対する自分の考えを「グループ交流→全体交流」という活動を行うことにより，進んで発表しようとするすることができる。
- 友だちの考えのよさに気づき，自分の考えを強化または修正することができる。

5 本時の展開

配時	学 習 活 動 と 内 容	教 師 の 支 援
9	<p>1 前時の学習を想起し，本時のめあてをつかむ。</p> <p>(1) 今までの医学について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 正確な人体を知る者がいない ・ 病気になっても病名が特定できない ・ 薬などの治療が適切にできない ・ うらない，祈とうなど・・・(ケガレ意識) <p>(2) 「ターヘル・アナトミア」の翻訳の難しさを体験し，本時学習のめあてをつかむ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 資料Aの人体図を提示し，解体新書以前の人体図がとても不正確であったことや解体新書が本物に似ていたことに気づかせる。 ○ 資料Bを提示し、『蘭学事始』にある「鼻は vooruiteekende (フルフッヘンド)する。」の意味を考えることで，翻訳の難しさを体験させる。
<p>杉田玄白らが解体新書を完成させることができた理由を考えよう。</p>		
1 5 1 2	<p>2 今まで，医学が進歩しなかった理由，虎松の祖父が解剖することができた理由について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ケガレ意識の存在 <p>3 解体新書を完成させることができた理由について全体で交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ターヘル・アナトミアが参考になったから ・ 老人の技術がすごかったから ・ これまでは遠くからのぞくだけだったのが玄白たちは間近で解剖に立ち会ったから ・ 真実を知りたいという強い気持ちから →ケガレ意識はない 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 玄白や良沢らの情熱，皮革産業に携わる人々のすぐれた体験と知識などの視点から，予想できる以下の資料を準備する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 資料C 蘭学事始の一部分 ・ 資料D 蘭学事始の一節 ・ 資料E 川口泰司さんの話 ○ 発言内容をネームカードを使って板書し，自分の考えを付加，修正しやすいようにする。 ○ 板書を工夫し，解体新書が完成させるまでに玄白らが乗り越えてきた壁が視覚的にわかるようにする。
9	<p>4 本時の学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 本時の学習のまとめを行うとともに，自己評価を行う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>杉田玄白らの真実を追究しようという強い心がケガレ意識に惑わされなかったこと，また虎松の祖父のもつ解剖技術が優れていたため、『解体新書』は完成し，医学が急激に進歩した。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時の学習を振り返らせ，学んだことを自分なりの表現で表せるようにする。 ○ 江戸時代の医師を含めた民衆と比べて，今の自分のものの見方や考え方を振り返らせる。

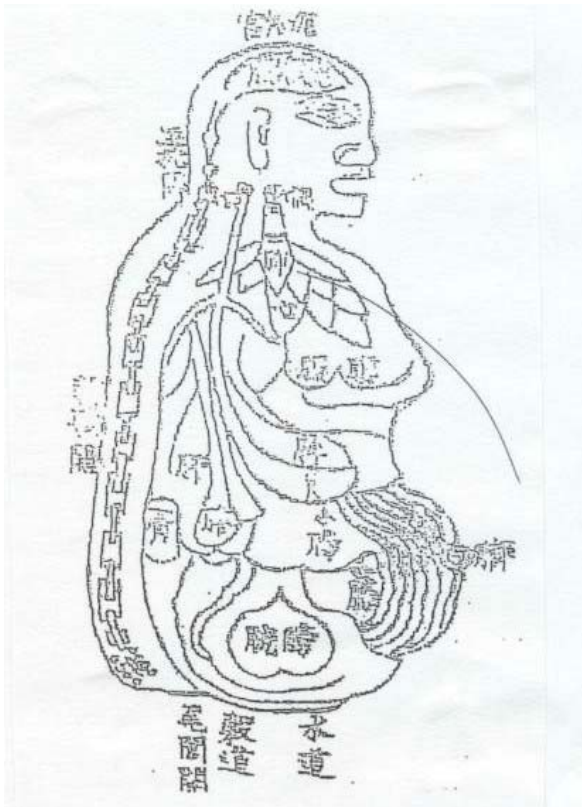
資料 A

① 現在の図かんにある人体図



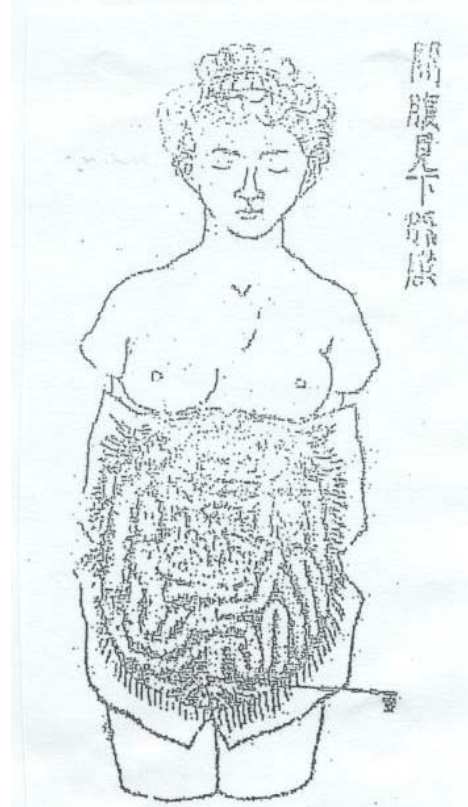
学研「からだのひみつ」

② 解体新書が出る前の人体図



東医宝鑑

③ 解体新書にかかれてある人体図



解体新書

資料B 「ターヘル・アナトミア」という本との出会い

1771年の春のことでした。私は、オランダ語で書かれた「ターヘル・アナトミア」という医学の本を手に入れることができました。私はもちろん一文字も読むことができなかったのですが、図に画かれている内蔵、骨格のぐあいなどが、今まで見たり聞いたりのものどたいへんちがっていましたので、「これは一度、体の内部を見てみたいものだ。」と思いました。

講談社学術文庫 杉田玄白著 片桐一男全訳注「蘭学事始」

資料C 腑分けの場面

ある日、奉行所より「明日の朝。骨が原^{こつがはら}で腑分けを行うので、希望があればおいでください。」との知らせを受け取りました。

私は、翌朝、友人である前野良沢^{まえのりょうたく}、中川純庵^{なかがわじゆんあん}をさそい、骨が原に向かいました。

さて、腑分けについては、その外の身分である虎松^{とらまつ}というものがとてもしょうずであると聞いていましたので、腑分けをたのんでおいたところ、その日はあいにく急病で、代わりにその祖父（虎松のおじいさん）である90歳ぐらいの老人が腑分けを行うことになりました。とても元気な老人で、若いときから腑分けを何度か行ったと話してくれました。その日も、老人はあれこれと指し示しては、「これは心臓でございます。そしてこれは肝臓、これは胃であります。」などと説明してくれました。私たちは、手に持っていたオランダの解剖書^{かいぼうしょ}（ターヘル・アナトミア）と照らしあわせてみたところ、1つとしてその図と違っているものはなく、まったく同じであることに驚きました。

講談社学術文庫 杉田玄白著 片桐一男全訳注「蘭学事始」

資料D 老人（虎松のおじいさん）の言葉

「これまで、腑分け^{ふわ}するたびに、いろいろな医者に見せました。だけど、だれ1人として『これは何という臓器（内臓のこと）ですか？』『これは、男にも女にもあるのですか？』『これは、外国人にもあるのですか？』などと細かく質問する人はいなかった。玄白さん、こういうことを質問したのはあなたが初めてだ。」

講談社学術文庫 杉田玄白著 片桐一男全訳注「蘭学事始」

資料E 川口泰司さんの話

どの腑分け^{ふわ}も実際にこれまで、解剖^{かいぼう}をしたのはその外^{ほか}の身分とされた人々だった。医者とはいうと、遠くはなれたところから解剖しているところをスケッチしていた。だから、杉田玄白たちより以前の解剖図は、内臓などがおおざっぱなスケッチだった。そうした中で、1771年に江戸で行われた杉田玄白たちの腑分けがあった。ところが、かれらの解剖は、これまで行われてきた他の解剖とはちがう。何がちがうかと言えば、かれら（玄白たち）は解剖される死体の前にドンとすわって、虎松のおじいさんと頭をすりあわせるぐらいに近寄って、いっしょに解剖の観察をしている。

明治図書 川口泰司「たいけん→はっけん→ほっとけんからのカリキュラム」